

<実践哲学としての「コミュニティ・デザイン論研究」を目指して>

3rd フレーム「What?文化」ワーキング

B. 話題提供（異世代・異分野の視点から）※

話題提供者：

前田昌弘（京都大学大学院人間・環境学研究科准教授）



「文化がせめぎ合う場としてまちづくりを記述する」

最近、まちづくりの現場をどうやって記述するかということに関心があり、建築分野の研究仲間や他分野の人たちと一緒に考えています。今回のテーマである「文化」について、最近の関心事や現場での取り組みを通してお話しできればと思います。

1. 「文化」をどう捉えるか

テリー・イーグルトンの『文化とは何か』では、文化が思想や政治の関係で、どのような形で表われるかについて述べられています。文化概念の派生体には、①規範としての文化、②生活様式としての文化、③芸術としての文化があるとされます。また、文化は、本質的に「反文明」や「反資本主義的」な姿勢を持っており、負の側面、暗い側面、抑圧的な側面も同時に併せ持つということとされています。近代化とは、反文化的なものとして育ってきたものだということです。そう捉えると、プレ近代とポスト近代は文化重視と言われるのも納得がいきます。建築の世界でプレ近代というと、明治から昭和の初期ぐらいの時代にあたります。大阪ガスビルなどもプレ近代の建物ですが、近代建築のように合理化され過ぎておらず職人の技や手仕事垣間見えるところがいいですね。ポスト近代は日本の場合、バブル経済と重なっているので、文化の再興と言いつつも、華やかな装飾など商業の匂いが強いものでした。

イーグルトンは、CULTURE（大文字の文化）と culture（小文字の文化）という言い方で文化を区別しています。大文字の文化は、普遍性、地域と時代の超越性、メジャー性があり、一方で、小文字の文化は、個別性、エスニック性、マイノリティ性があります。先ほどのお話にあった柳田国男や宮本常一がみつめた辺境は小文字の文化の世界で、それらが西洋近代の大文字の文化によって制圧されていったのです。

アルジュン・アパデュライという、インドで生まれ育ち、インドとアメリカで教育を受けて、アメリカの大学で研究者になった人類学者がいます。この人はグローバリゼーションの研究者として有名です。私自身もスリランカ、南アジアで研究を長くしていることもあって、アパデュライの言っていることには、スリランカの人たちの生き方や社会のあり方を理解する上で納得いく部分がけっこうあります。

民族学や人類学では、ある地域や場所に固有の文化があって、それを突き詰めて研究していくという前提がありました。建築学の民家・集落研究も基本は同じです。しかし、アパデュライは、物や人の移動が激しくなった現在、文化は特定の場所だけでは捉えられないと言っています。イーグルトンの『文化とは何か』では、西洋近代的な文化概念が広まっていき世界が均質化するのではないかという懸念が示されています。一方、アパデュラ

イはそうではなくて、逆に、ローカルな変容が世界中で不均等に起きて、むしろ文化は多様になっていくということを行っています。

つまりアパデュライは、人類学や地域研究が自明視してきたローカリティそのものが失われ、変容しつつあるという現状を指摘しており、彼はさらに、五つのスケープ（エスノスケープ、テクノスケープ、ファイナンススケープ、メディアスケープ、イデオスケープ）のずれと重なりから現状を理解するというユニークな枠組みを提唱しています。

著書『さまよえる近代』の中で、クリケットを「硬貨（コイン）の文化」だと言っています。コインの裏表のように、「身体的な実践」と「価値観・意味体系」がかみあっていて、身体実践を通じて、ある規範や価値が自然と身に付いていくようなもののことを、「近代の道具（means of modernity）」とも言っています。イギリスの植民地であったインドでクリケットを広めることによって、イギリス人が良しとする公正さや協調性をインド人に植え付けていったのだということを行っています。

ただ、面白いことに、そういった一見すると強固にみえる「コインの文化」でさえ、地域の文脈に置かれ時間が経つと変質していき、全く新しいものになっていくということもアパデュライは言っています。クリケットは紳士のスポーツといわれていますが、インドでは庶民からも愛される大衆化されたスポーツになり、商業化もしていきました。クリケットに限らず、西洋的な資本主義や市民社会をも変質させていく、文化がもつ「下からの力」を、アパデュライは肯定的に捉えているところがあります。

2. まちづくりとは？

まちづくりの話に入る前に、日本における「まちづくり」の生成と展開について、私なりの理解をお話しておきます。まちづくりは1960～70年代ぐらいまでは大規模開発や公害への反対・抗議運動にとどまっていたましたが、1980年代になると、行政の都市計画に住民が参加して環境を改善していく前向きな動きになっていきます。地域ごとのルールを定める地区計画という制度ができたのも1980年でした。

1970年～80年代のヨーロッパに目を向けると、イギリスなどで、地方分権や民間活力の活用という、新しいまちづくりの流れが起きています。西ヨーロッパの国では歴史のある建物を使い続ける文化があるとよく言われますが、古い建物を残し、そこに手を加えることで場所ごとに新しい価値を見いだすという、リノベーションまちづくりの動きが出てきたのは意外と最近で、20世紀の終わりぐらいです。その背景として製造業の衰退や人口の減少などが起きていました。この頃、日本はバブル経済だったので、スクラップアンドビルドを続けていて、リノベーションまちづくりの動きはもっと遅れてやってきました。

2000年代以降は、行政の取り組みに住民が単に参加するのではなく、住民が主体となり、住民が自らまちづくりの計画や取り組み等を提案して行政や市民、事業者と連携・協働することが盛んになっていっています。ただ、京都は前近代や明治初期からの地域自治の精神が続いていて、日本の都市のなかでは少し特殊な立ち位置にあるとは思いますが。

このように、まちづくりは時代や場所によって意味合いが異なり、従って、その定義もいろいろなのですが、私なりにはまちづくりを「現代を生きる人びとが主体となり地域の歴史、文化のなかで人と環境との関わりを共同的に管理する営み」と定義しています。このことを念頭に、ここからは現代のまちづくりを捉える上で重要であると思われる視点を

2つ、紹介していきます。

3. 現代のまちづくりへの視点①人と環境の関わり

一つ目の視点は、人と環境のトランザクショナルな関係です。トランザクショナリズム (transnationalism) とは、人と環境をそれぞれ独立したものとして捉えることに警告を發し、人間も有機体の一つと捉えて、人と環境を有機体—環境という全体状況の過程として扱い、人と環境を互いに定義も意味も依存し合った不可分なものとして一元論的に捉えていこうとする立場です。

トランザクショナリズムという考え方は様々な分野にまたがっていて、建築学の分野では、心理学者シーモア・ワップナーが發展させたトランザクシヨンの概念を建築計画の研究者が積極的に取り入れて、人の心理から建築を見ていったという経緯があります。教育学者・哲学者として有名なジョン・デューイも実は、トランザクシヨンについて早くから論じています。彼はダーウィンの進化論に刺激を受け、人と生態環境、物理環境との関係を社会環境との関係にまで広げて大衆化する社会における市民像について考えました。

トランザクショナリズムという考え方が起きた背景には、「環境決定主義」や「技術決定主義」への反省があります。環境決定主義とは、人間の行動や性質が、気候や風土といった環境の条件に起因するという考え方です。歴史をみるとこの考え方が特定の人々の利益に都合が良いように用いられ、ある人種や民族の優位性を主張する自文化中心主義を強化する根拠になってきました。

ジャレド・ダイヤモンドの『銃・病原菌・鉄』なども、ある意味で環境決定主義のアプローチをとっていますが、様々な事実や科学的データにもとづき、特定の社会の覇権がその社会を構成する人々の遺伝的優位性に起因するという考え方を真っ向から否定しているのが面白いところです。ただ、環境決定主義は、歴史の大部分で権力者によって政治的に利用されてきましたし、近代になると都市や空間のつくり方に明確に仕組まれていきました。パノプティコンは、環境決定主義にもとづく空間の最たる例で、功利主義で有名なジェレミー・ベンサムが考案した刑務所のモデルです。真ん中に監視棟があって、その周りに独房が配置されています。監視棟が光を反射するガラス張りになっていて独房の囚人から監視者が見えない仕組みになっています。それにより、独房にいる囚人は監視者によって常に見張られているような気分になるのです。ここでは空間の形式が、囚人の心理や行動を著しく規定しており、まさに環境決定論的な人と空間の関係がみられます。

クロード・レヴィ・ストロースの『悲しき熱帯』では、アマゾンのボロロ族という部族の集落の構造が紹介されており、彼らの親族関係や社会関係が集落の空間によって媒介されているという、まさにトランザクショナルな人と場所の関係が描かれています。レヴィ・ストロースがブラジルに滞在していたのは1930年代で、『悲しき熱帯』は、彼がフランスに戻って暫く経ってから回顧録として書いたものです。1930年代には既にアマゾンの部族の人たちも西洋化、キリスト教化の影響に晒され、集落の構造もどんどん崩れていったようです。ヨーロッパから来た宣教師たちは、彼らの文化や社会を変えるために、まず集落の建物の配置を換えさせて、それで西洋の考え方を植え付けていったと書かれています。トランザクショナルな関係で成り立ってきた集落の社会に、外部の人間が環境決定主義的な考えを持ち込んで文化を変えていったということです。

このような例からもわかるように、トランザクショリズムと環境決定主義は対立関係にあると捉えられます。アマゾンの部族だけではなく、社会の中で弱い立場にある人、周縁化された人は、トランザクショナルな関係によって、生き方や暮らしが何とか保たれている。そういったことを感じる場面に私自身、よく遭遇します。たとえば、被災地で倒れかけた建物に住みつづける人や、京都で路地の奥に独りで住んでいるお年寄りなどです。その場所があるからこそ、その人らしくいられる、暮らしていけるという関係が確かにあって、都市計画や近代主義はそのような関係を断ち切ることで拡がっていったと言っても言い過ぎではないと思います。

4. 現代のまちづくりへの視点②主体とプロセス

2つ目の視点が、主体とプロセスで、それらを分人主義やアクターネットワーク論の考え方をもとに捉え直していくということを考えています。分人主義とは、それぞれ独立した個人がいてお互いが個として直接結び付いているのではなく、様々なもののやりとりを通じて関係付けられた結び目のようなものとして、人々の人格がつくり出されているという考え方です。この考え方の発展に貢献した人類学の分野では、やりとりされる様々なものを「サブスタンス」と呼ぶそうです。サブスタンスには食物や贈り物、血液・精液等も含まれるようです。

個人は英語で「individual」ですが、これには分割不可能（「in-dividual」）な一貫した人格としての「私」が含意されています。これに対して分人（dividual）は、「私」というものの中にも関係性に応じて複数の人格が存在しているのだから、身体としての私はひとつだけれど、人格という意味での「私」は、分割可能であるということの意味をしています。

南アジアやオセアニアは「分人」的な人の在り方が顕著な社会であるとよくいわれます。たしかに、私もスリランカの人たちと長く付き合っていて、そのことを感じる事が少なくないです。日本の社会も個人よりも周りとの関係性をまず気にするので分人的かもしれません。作家の平野啓一郎さんは、分人概念を日本の文脈に当てはめて、生きづらさから逃れる「私」の捉え方として、「個人から分人へ」ということを言っています。

アパデュライも『不確実性の人類学』のなかで、グローバルなフローの中で取引される金融とそこでの人間の扱われ方について分人の視点から分析しています。彼は、少数の人々が自分の利益獲得のために他の人たちを分人化していくような在り方のことを、「捕食性分人主義」と言っています。そうではなく、不確実性に賭けることを通じて、全体が豊かさを享受できるような人びとの在り方を「進歩的分人主義」と言っています。

私の理解では、分人主義とは、血族や宗教集団、部族など集団を前提にするのではなく、個人の間やりとりされている何かを介して私という主体、さらには社会の全体性が生まれていくという発想です。やりとりされるものには、いろいろなものがあってよくて、先ほどの話題提供で紹介された伝統野菜の越瓜（しろうり）などもそれに当たるのではないかと思います。

フランスの哲学者・人類学者であるブルーノ・ラトゥールも、人以外のものも人と同じく行為者性を持った主体（アクター）として捉え、人と人以外のものを含む多様なアクターがお互いを介して社会というネットワークを構成しているという世界の見方を、アクターネットワーク論として示しています。

ラトゥールは面白いことを言っています。それは近代というものが、理想的には人と自然、社会と環境、心と身体といったふうに世界のあらゆるものを二元論的に分けるのですが、現実としては、分けられたものが無制限に結び付いていって、非常に複雑でハイブリッドなネットワークを生み出していっているということです。その現象は、分けられたけれど結び付いているとも言えるし、分けたからこそ、今まで制限されていた結び付きが新たに生まれていったとも言えます。

京都のコミュニティを見たとき、つい最近まであった近隣社会・コミュニティの在り方を、建築学者の上田篤さんが、「義理の共同体」と呼んでいます。これは、京都・西陣のような職住近接の地域社会、商家が軒を連ねるコミュニティにおける人間と空間の関係のあり方を言い表したものです。そこは、いろいろな価値観の人が限られた範囲に密集して暮らしている社会なので、人付き合いにも他者になるべく深く立ち入らないための暗黙のルールがあって、それによって異質な人びとの共存が可能になっています。

その暗黙のルールというものも、京詞や格子窓、鰻の寝床状の敷地といった人工物によって媒介されていて、まさに人と人以外のものが混成されて、独特の関係原理にもとづく地域社会が出来上がっていると言えます。そして、ちょっとした私的な付き合いさえも、地藏盆などの行事で様式化、形式化され、人のことに深く立ち入ったり、貸し借りの関係が生まれたり、情が移ったりということが起きないような仕組みになっていたということです。このような「義理の共同体」にみられる人びとの在り方も、アクターネットワーク論的な見方から見ると、異質な人びとが共存するために、いろいろなものが媒介となって、人と人のつながりを制限する仕組みが成り立っていたと言えます。

5. まちづくり：「文化」のせめぎ合いの場

日本における住民主体のまちづくりは、近代都市計画が自明視してきた環境決定主義に対する反省や、個人主義をベースとした西洋近代的な市民社会の乗り越えとして展開してきたところがあります。しかし、乗り越えようとするのだけれど、現実には都市計画との両輪で住民主体のまちづくりもあるので、乗り越えようとしたものを包含しながら、展開していると言えます。私が関わっている、住民主体のまちづくりの現場でも、昔ながらのマスタープラン的な計画を作ったりすることは普通にあります。ですから、計画文化（planning culture）にも冒頭で述べたような「大文字の文化」（マスタープラン的な上からの計画）と「小文字の文化」（まちづくり的な下からの計画）があるとすれば、異なる文化がせめぎ合う場所として、まちづくりがあるのだと思います。

6. まちづくり記述の実践

6-1. 「計画を記述する」実践的研究

そのようなことを考えながら、まちづくりの現場で起きていることをどうやって理解したり、具体的なアクションに繋げていけるか、ということ最近考えています。

最近、特に力を入れているのが、まちづくりの記述というテーマです。まちづくりの実践に積極的に関わりながら研究している大学研究者たちと「計画を記述する」という言い方で、自分たちが関わっているまちづくりの実践をいかに説明できるか、ということを考えています。

「計画を記述する」という、なんだか回りくどい言い方をしているのには訳があり、そこには2つの意味が込められています。一つは文字どおり、「計画を作る」（計画図を描く）という意味で、もう一つは「計画するという行為を描く」という意味です。

計画の記述を通じて、「私たちはどのような関係を環境との間に取り結んできたのか」ということについて理解が深まり、それを通じて、「このまちに関わる私たちはやどんな主体なのか、どんな主体でありたいか」ということが意識化されるようになり、それがひいてはまちづくりの主体のエンパワーメントになるのではないかと考えています。

計画を作るということもそうですが、描くという行為を通じて主体が形成されていくということが、もっと大事だと思っているわけですね。今日はそれと関連して、私が関わってきたいくつか事例を紹介したいと思います。

6-2. スリランカ旧紅茶農園：文化の脱領土化、文化の異種混交

バウラーナ村はスリランカの山奥にある村で、イギリス植民地時代の今から約150年前、スリランカがまだセイロンという国名だった時代に紅茶プランテーションとしてつくられました。しかし、1948年後に国が独立してから経営がうまくいかず、1980年代初頭に農園としては閉鎖されました。閉鎖から40年以上がたちますが、村内にかつての労働者の住まいであるラインハウスと呼ばれる長屋群が残っています。

長屋に現在住んでいるのは、インディアン・タミルという人たちで、イギリス時代に紅茶農園の労働者としてインドからスリランカに渡って来た人たちです。彼らの3世、4世が農園閉鎖後も村に住んでいます。彼らは、最近までスリランカの国籍や市民権も認められずに暮らしてきたマイノリティです。紅茶はスリランカの国にとって重要な輸出品ですが、紅茶プランテーションには様々な社会問題もあって、改善すべき対象となっています。プランテーションを管轄する省庁のホームページには、暗くて薄汚れた長屋の写真が載っていて、それを明るい戸建ての住宅に建て替えましょうという表現がされています。いわば、長屋がプランテーションの社会問題の温床として象徴的に描かれているのです。

ただ、その話は知らずにバウラーナ村を訪れた時、私が最初に感じたのは、長屋の文化的な魅力でした。長屋には、先ほど述べた文化の異種混交というか、ハイブリッドが見られます。建設当初のイギリスの建築技術であったり、ここで暮らしたタミルの人びとの生活文化が感じられる美しい台所や食文化、そしてスリランカの気候風土に根ざしたベランダ空間や分厚い石積みの壁といったものがありました。このような文化のハイブリッドが長屋の建築や暮らしに表れていて、紅茶農園は閉鎖されたけれど、タミルの人たちの暮らしはそのような長屋の住環境と関係しながら今も続いているのでした。

長屋の長老や住人に話を聞いたり、長屋の実測調査をしたり、空き家になった長屋の利活用について地元の行政の人と交渉したりしました。長屋の長老はおちゃめな人柄で私たちの活動にも協力的だったのですが、老衰のため数年前に亡くなってしまいました。彼からは、子どもの紅茶農園がまだ現役だった当時の話を聞いたりもしました。

彼らにとって長屋とはどういう存在なのか、私はずっと疑問に思っていました。国は長屋を「負の遺産」として扱い、住民に聞いても、あまり肯定的な言い方をしません。長屋はやはり暗くて不便だ、もっと便利な住まいに移りたいと言うのです。

しかし、長屋の建物や暮らしをじっくり観察していると、少し異なる姿もみえてきます。

例えば、ある長屋は元々、1戸に1家族が割り当てられ各戸が独立したものでした。しかし、住人は都市部や海外などに出稼ぎに行ってお金がたまると、長屋から引っ越すのではなく、空き部屋となった長屋の隣の部屋を取得して自分たちの部屋とつなげていき、今や大きな屋敷のようになっていきます。そのような行動を見ると、長屋は彼らにとって帰るべき場所、ホームになっているということが感じられます。

この長屋を調査をしているとき、ちょうど娘さんが戻ってきました。彼女は普段、コロンボというスリランカ唯一の大都市で仕事をしているそうで、ある意味で村に似つかわしくない都会的で垢抜けた格好をしていました。この出来事からも長屋での暮らしは、グローバルな経済と結び付きながらあり続けているのだと感じました。

私たちが提案した長屋の改修計画も、そういった、長屋に住みつづけてきた人びとの実践に学び、その延長で何かつくることを考えました。結果的に、今も住人が暮らしている長屋の一部を再生して、そこに外から来た人が滞在して村の暮らしや文化を体験できる拠点をつくりました。

再生の工事を村の人たちと一緒にやっていたとき、面白いことが起きました。長屋に使われていた石積みの壁のブロックを昔、村の誰かが自分の家の建設に使うために持って行ってしまったそうです。それで、いい石なので長屋の再生に使いたいと思って、村中に散らばって放置されている石のブロックをかき集めようと思いました。そうすると、村の一部の人たちが石に値段を付けはじめたのでした。石のブロックにはもともと値段なんてなかったわけですが、私たちのような「よそ者」が彼らをとりにくくネットワークの中に飛び込むことで関係がゆらぎ、新たな価値が生まれていったのでした。私たちは石のブロックに値段が付く前に慌てて村じゅうから掻き集めました。

拠点は2016年4月に正式にオープンし、コロナ禍での中断もありましたが、今も続いています。長屋で生まれ育った20代の女性をスタッフとして雇用し、拠点の運営を手伝ってもらっています。彼女には外国人の訪問者に対応したり、村のガイドをしてもうためにコロンボにいて英語を勉強してもらいました。ただ、まだ若い彼女に村の歴史やお寺のことを尋ねても全然知りませんし、興味もないようです。ただ、興味のないことを無理に勉強する必要もないので、「君たちが普段食べているものや普段やっている遊びを教えてくださいたいよ。そのようなのが好きな人がここに来るから」という感じでやっています。

このように、長屋を拠点として村のアクターネットワークに入っていくと、村の人たちの価値観や長屋が秘めている価値をどうやって記述して共有していけるかということを考えながら活動を続けています。

6-3. 京都の地蔵盆：「信仰」と「想像力」が生む共通関心

地蔵盆は京都や近畿地方で親しまれている夏の行事ですが、京都で地蔵盆をどのぐらいの地域がやっているか、その実態は意外と最近まで知られていませんでした。2013年に京都市が町内会・自治会を対象にして行ったアンケートでは、市内全域で8割近い町内が地蔵盆を開催していると答えました。お地蔵さんも7割ぐらいの町内会・自治会にあるようです。お地蔵さんがある町内はもちろん地蔵盆を行っているけれど、お地蔵さんがいないところも4割近くは行っています。これは地蔵盆のときだけお地蔵さんをお寺から借りてきたり、お地蔵さんを預けているお寺で行っているということです。このように地蔵盆は市

内全域で今も唯一と言っていいほど続けられている行事です。

上京区、下京区、東山区など、昔から市街地だったところで、地蔵盆の実施率が高くなっています。地蔵盆は最近、京都市独自の無形文化遺産に登録されたり、レジリエンスやSDGsといった都市戦略の中で、コミュニティ形成の基盤となるよう生活文化として触れられたりしていて、脚光を浴びています。

最近、地蔵盆に関する研究書もたくさん出ていて、『京都 地蔵盆の歴史』(村上紀夫著)は、中世から現代に至るまで、京都の地蔵盆の歴史をまとめた基礎的な資料です。「京都における地蔵の配置に関する研究 都市形成と聖祠の配置の關係に注目して」(竹内泰著、京都大学博士論文)は、地蔵が都市の中でどのように配置されてきたかを研究したものです。

地蔵盆の起源は、江戸時代の中ごろに子どもたちが石ころを拾ってきて、それをお地蔵さんに見立てて祀った遊びとして始まったといわれています。17世紀に京都が都市としてさらに発展する中で土木工事が各所で行われ、御土居の中や鴨川の底などからお地蔵さんらしき石仏や石ころが見つかったそうです。それを町の人たちがありがたがって祀り、共同体のものとして定着したといわれています。当時は地蔵会、地蔵講という名称でしたが、遅くとも江戸の末期には市内全域に定着していたことが旅行記等で描かれています。

それが近代に入ると、京都府からの命令で、地蔵盆のような古い習わしはこれから近代化を目指す日本にふさわしくないからやめなさい、地蔵盆も撤去・売却して学校の建設資金として寄付しなさいという命令が出ました。しかし、そのような命令に抵抗して、町の人たちはお地蔵さんをおかまったりして、10年ぐらい経って命令が撤回されると地蔵盆もすぐに復活しました。そのときに禁止されていたいろいろな盆行事と一緒に復活したということで、地蔵盆という名称が一般化していったといわれています。

その後、戦後の高度成長期には、子どもが多くてにぎやかな時代ということもあって、地蔵盆の行事とあわせて様々な余興を町の人が考えたり、地蔵盆の夜に盆踊りをしたりと、娯楽的な要素が広まっていきました。最近では少子化、高齢化で、簡略化や衰退の波が来ていますが、それでも地蔵盆は根強く続いているという状況です。

京都の街のいたるところにあるお地蔵さんを眺めていると、地蔵菩薩の形をしているものも確かにあるのですが、「これ、ただの石なのでは」というものも結構あります。そのような小さなものをお地蔵さんや小さな子どもに見立てて町のひとが大切に祀っているのです。ジョン・デューイは信仰を「人びとが理想を見だし想像する力」だと言っています。想像力というのは、目の前で知覚された石ころのようなものと、共同体の集団的意識(記憶、理想)を結び付け、現在の経験として再構成する力ではないでしょうか。例えばお地蔵さんには元々、子どもの守り神という謂れはないらしいのですが、なぜか数多くの説話でお地蔵さんは子どもの姿を借りて人びとの前に姿を現しています。また、昔は災害や飢饉で幼くして亡くなる子どもが今よりもずっと多かったため、共同体で子どもたち守っていくという理想があったわけです。そのような記憶や理想と結び付けて再構成されたものが地蔵盆であり、それはまさに人びとの豊かな想像力のなせる業ではないでしょうか。

分人論やアクターネットワーク論に依拠して、環境を構成する人間以外のものも主体だと考えたとき、信仰や想像力といったものが、石ころのようなものをも主体たらしめています。そのような近代合理性にもとづく世界理解の外側にあるような行為や力を扱わなければ、アクターネットワーク論は、当たり前のことを言っているにすぎないわけです。

京都の街なかで現在みられる地蔵盆の多様な在り方は、場所ごとの事情に応じて形を変えながらも地蔵盆が続いてきたことを示しています。そのような地蔵盆の多様な在り方からは、地蔵盆を通じた人と環境の柔軟で多様な関係の在り方が観察できます。

いくつか具体的な例を挙げると、この町は今もにぎやかに地蔵盆を行っている町内です。町内の空間をほぼ全て使って、いろいろな行事をしています。通りにテントを張ったり、ちょうちんをぶら下げたりして、かき氷の機械も出てきます。「ふごおろし」という、向かいの建物の2階からロープを渡して、かごに入れた景品を下ろしてくるという余興もあります。実はこの町内は、数年前までは町内会が高齢化してすたれていて、地蔵盆もやめようかという話があったそうです。しかし、あるときに町内に分譲マンションができて、まずその住民や子育て世帯を地蔵盆に招待して、地域になじんできた頃に、町内会の役員をやらせてもらって町内が再び活気づいたそうです。先ほど弘本さんもおっしゃっていましたが、流動民を取り込むきっかけとして地蔵盆が機能しているということです。

また、ある町は、町内に子どもがいなくなっても地蔵盆が続けられているケースです。ある時、小さい子どもがゼロになってしまったのですが、大人だけでも集まって、お坊さんによるお経やお話が終わると、大人、と言うか、おじいちゃん、おばあちゃんだけで輪投げをしたりして和気あいあいと過ごしています。この町内では地蔵盆の日にガーデニング（花や苗木の鉢植え）をすることが恒例となっているらしく、地蔵盆が終わると鉢植えをそれぞれ持って帰って自宅の軒先等に飾ることが地蔵盆の行事とセットになっています。このような、少子高齢化のなかで現代的な意味付けや行事を付け足し、それぞれ工夫しながら地蔵盆を続けています。

また、最近では元学区という、町内の一つ上の単位での地蔵盆も行われています。御所の南にある竹間学区では、学区の社会福祉協議会と民生児童委員会が企画して、マンションの子どもたちのための「夏休み体験」という形で地蔵盆を行っています。体験といいつつも表面的なまねごとではなくて、お寺からお坊さんをお呼びして、お経を唱えて数珠まわしという大きな数珠を車座になって回す行事も行うので、わりと本格的です。

会場となった自治会館の一室に祀られていたのが画用紙に描かれた手書きのお地蔵さんだったのには度肝を抜かれました。世話役の方が前日の夜に描かれたそうです。

また、今の子育て世代の関心に合わせて、エコについての学習や、SNSに上げる写真を撮影するスポットがあったりして、現代的にアレンジされています。宗教色をあまり出さないという配慮も恐らくあるのだと思います。

コロナ禍での地蔵盆の状況が気になっていて、2020年から毎年、地蔵盆の開催予定についてのアンケートと、地蔵盆当日のフィールドワークを続けています。学生たちと手分けをして、京都市の中心エリアである田の字地区で、地蔵盆がどのような形で開催されているか記録しています。

その結果、コロナ禍でも意外と開催している町内は多いけれど、普段より規模を縮小したり行事を簡略化しているところが多いということがわかりました。祠の前に簡易の祭壇を作って、読経には役員の方だけが参列します。また、町内の班ごとに時間を分けて、参列者が集中しないようにして、それぞれがお参りやお供えをするという工夫をしているところもありました。

このように、コロナ禍という危機の状況の中でも、地蔵盆のレジリエンス、つまり柔軟

な対応力、回復力が発揮されています。

人間関係が希薄になりコミュニティの存在を実感すること自体が難しい時代になっています。そんななか、お地蔵さんと地蔵盆は、コミュニティの媒介となり得る、時代の変化の中で形を変えながら、地域とあり続けてきた存在です。最近、行政は地蔵盆をコミュニティ形成の手段のように捉えていますが、そのような捉え方には危うい面もあります。上からの力に対して抵抗する際の拠り所として、地蔵盆は存在してきたわけですから、上から与えられた意義や価値づけは、そのような地蔵盆の在り方にそぐわないのです。

お地蔵さんという存在は、人によっていろいろな関心の持ち方ができるし、それぞれの想像力を喚起するということところが非常に大きな強みです。ある人は、お地蔵さんを見て、子どもの守り神だと思い、ある人は火の用心や地域の防犯、安全のようなことを思い、ある人はご先祖様の供養を思うなど、それぞれの関心で関われるというところがあります。

ただ、地蔵盆の継承はいろいろな理由により難しくなっています。だったら地蔵盆も時代にあわせてアップデートしていけばよいと思います。町内で続けてきた地蔵盆を基本としつつ、学区の地蔵盆など、地域に馴染みのない人も関心を持ってもう少し関わりやすい形で地蔵盆をするということも十分あり得ると思っています。

コミュニティの活性化のために地蔵盆があるのではなく、地蔵盆を続けていくことが、結果的に地域コミュニティの活性化につながっていくということを忘れてはいけません。

人と地蔵の関わりのようなものがあると、それを周りから眺めていた人が、その関わり自体を通じて、地域に関わっていくということが起きます。これはいわば、トランザクションの周囲への波及です。地蔵盆という行事を外から見て、「これは地域の伝統行事だな」「地域の人が仲良くなる親睦の機会だな」「京都らしい生活文化だ」など、感じ方は様々で、だからこそ、そのような場に関与していくことが、連鎖的に生まれていく。こんなふうになったらいいなと思っています。

6-4. 牛窓・街並み保全：『語り』の語り」と主体形成

最後に、瀬戸内海の港町・牛窓での最近の実践について紹介します。牛窓がある瀬戸内市は人口が3万5000人という小さな自治体です。牛窓は岡山県の瀬戸内海沿岸で唯一、過疎地域に指定されているところです。

1950年代ぐらいから、主要産業であった造船業が衰退して、かつ鉄道が通っていないという交通アクセス上の課題もあって、人口流出が急激に進みました。しかし、牛窓は元々、瀬戸内海の海上交通の要所で、江戸時代に朝鮮通信使が主要な寄港地とするほど、文化的にも経済的にも栄えた場所で、政治的にも重要な、いわば外交の拠点でもありました。

牛窓にはだんじりがあるのですが、朝鮮の人たちが当時乗っていた船の形を模していたり、唐子踊りという朝鮮の文化が交ざった風習が残っていたりします。江戸時代から人と文化が行き交う場所で、その名残が今でもあるという場所です。

港の周辺が昔から街だったところで、そこを通るかつてのメインストリートに「しおまち唐琴通り」という名前が後から付けられました。その通り沿いにも商家や町家、朝鮮通信使ゆかりの井戸、灯台などが残っています。ですが、過疎化によって空き家や空き地が増え、普段は人気も少なく、現在は寂れた街という印象を受けます。

ただ、最近、特に2012年頃からは牛窓に移住してくる人たちが増えています。牛窓には

空き家が多いこと、他の瀬戸内海の町とは違う雰囲気があること、あまり観光地化されていないということ、制作に打ち込める環境だということで、工芸家やアート系の人が古い家を自分で改修して暮らしています。

さかいさんという方は初期の移住者で、東京から夫婦で牛窓に移住してきました。「匙屋」を名乗る、木工の工芸家です。港のすぐ近くに工房とお店を構えていて、最近は匙屋を訪れるために牛窓に来る人がいるぐらい、知られる存在になっています。2014年に、最初に牛窓に行ったときに、移住者で初めて会ったのがさかいさんです。その頃に比べると、移住者や空き家の活用が増え、活動が点から線や面に広がってきている感じがします。

たとえば、岡上でギャラリーを運営されている末藤さんという方が牛窓クラフト散歩というイベントをしています。唐琴通りの空き家を2~3日だけ貸してもらって、全国からアーティストや工芸家を呼んで、展示や販売をしています。町を開いて、一時的にイベントの会場にするということをやっています。空き家活用や移住促進を目的としているわけはありませんが、結果的にはそのようなことにも繋がりそうな、興味深い取り組みです。

牛窓には町立病院（瀬戸内市発足後は瀬戸内市牛窓診療所）があったのですが、5年ぐらい前に閉鎖して、空き家となりました。その建物を市がリノベーションし、牛窓テレモーク（ushimado.tepemok）という施設になりました。テレモークの運営は、牛窓に移住してきた人たちが中心になってつくった会社が建物を市から借り受けて行っています。彼らが掲げるこの場所のコンセプトは「文芸的、公共的」で、1Fがカフェとお店、展示空間、2Fがシェアオフィスとコワーキング、イベント空間となっています。ただ、竣工時が完成ではなく、時間をかけて徐々に成長、変化していく場所づくりが掲げられています。

テレモークの2階の1室を、私の研究室と、岡山市内に事務所を構える片岡八重子さんという建築家と共同で借りて、牛窓ラボ（ushimado.labo）という研究活動拠点としています。

ラボを拠点として、地元の人たちとも連携しながら、牛窓の地域のことを調べて、今後、牛窓というまちをどうしていくか、一緒に考えています。

ラボには幾つか活動の柱があるのですが、その一つが、牛窓で活躍するまちづくりの活動家たちにインタビューし、彼らの語りを通じて牛窓の特徴を探るという試みです。牛窓は小さなまちでかつ過疎地ですが、まちづくりのプレーヤーが多いと思います。ただ、まとまって何かをやるというより、それぞれが好きな活動をやっているという感じですか。それは、様々な人が行き交っていた港町に特有の、他者に対して関心を持つだけでなく、あまり干渉しないという文化なのではないかと言われています。

ただ、昨今の空き家問題やそれに伴う街の衰退などを考えたとき、あまりにもお互いのことを知らなさ過ぎるのは問題だし、何らかの形で緩やかにつながる仕組みがあったらいいよねという声が聞こえてきました。

瀬戸内市にいる松井隆明さんという30代の職員と話すなかでも、プレーヤーが情報共有したり議論するプラットフォームのようなものが必要だけれど、それを行政が上からいきなりつくっても、牛窓のプレーヤーはみんなそういうのが嫌だから個々に活動しているわけで、うまくいかないだろうね、と。なので、まずそれぞれの活動家に話を聞いていきましょうということで生まれたのが「牛窓がたり」の活動です。

活動家に毎回2時間ぐらいインタビューをして、それを記事にまとめ毎号4組ずつのインタビュー集として発行しています。不特定多数にむけてというよりは、牛窓に関わる人

たちがお互いを知るためのメディアと捉えているので、その人の活動に一見すると関わりが薄いようにも見えるライフヒストリーというか、ディープな背景も掘り下げています。

その人がやっている活動の内容そのものも大事だけれども、その人のバックグラウンドがもっと大事で、それを通じて、現在どうしてそのような活動をするようになったか、何を大事にしているのかということが透けてみえてきます。そういったことに触れる機会は、同じ地域で活動していても意外と余計になかったりします。そのようなことも意識して、「牛窓がたり」を通じてまちについて考える機会をつくるということを考えています。

ただ、冊子を作って配っていただけだと、大体の人は忙しいし、あまり読んでくれません。せっかく作ったのだし、これを活用し、市としてもプラットフォームづくりに向けて交流を促したいということなので、「牛窓読書会」というワークショップを企画しました。

読書会の流れは、STEP1:「牛窓がたり」の記事をその場で読み込む、STEP2:「読み手」(参加者)が記事の「語り」について感想を述べ合う、STEP3:「語り手」が読み手の感想やコメントに回答する、となっており、STEP1~3を数回繰り返し、最後にSTEP4各テーブルで意見を発表し全体で共有します。読書会は、「語り」について語るということをテーマにしている、これは心理療法等で知られるリフレクティングプロセス(会話についての会話)の手法を参考にしたものです。要するに、他者の語りにじっくりと耳を傾け、他者の視点を介在させることで自分自身や自分の街への認識に新たな発見が生まれるのではないかと、ということを期待しているわけです。

語り手は現時点で12組いて、Uターンしてきた住民や地元の信用金庫なども含まれますが、大体は他所から牛窓に移住してきた人たちです。自分で事業をしている方が多いのですが、たとえばお店をやっている、店を開けているのは週に3日か4日ぐらいで、その他の空いた時間は、趣味や何らかの活動に時間を費やしている人が多いです。そのこともあり、業種や組織・肩書だけでその人のやっていることを理解することが難しく、だからこそ個人にスポットを当てるのが大事です。

読書会では、聞き手となる参加者が、語り手を前にして、15分ほどかけてその人についての「牛窓がたり」の記事を読み込みます。第1回は、牛窓テレモーク2階の海が見えるコワーキングスペースで行いました。瀬戸内海の風景を背に、大勢の大人たちが黙って記事を読んでいます。

STEP2では、語り手を前にして、読み手が記事についての感想を述べ合います。このとき、語り手はただ耳を傾け、会話に口を挟みません。聞き手の人たちは、最低限のルールとして「いち個人として参加する」「相手の意見を否定しない」ということを共有しているのですが、それでも目の前でいろいろな感想を言い合っているのです、語り手によってはちょっと不安そうな様子で会話を見守っています。

STEP3では、語り手も会話に参加して聞き手の感想や質問に回答しながら、フリーにディスカッションをします。牛窓という限られた地域なので皆が知り合いかというと意外とそうでもないようで、読書会を通じて知り合ったり、感性に共感したり、という機会が生まれている様子でした。

最後にSTEP4では、各テーブルどんなことがあったかということ共有しますが、何か結論に至るのが目的ではありませんので、特に何かまとめたりはせずに終わります。

このような「牛窓がたり」や「牛窓読書会」をきっかけとして「語り」の収集と記録・

編集、共有・フィードバックのサイクルをつくっていかようとしています。そういったサイクルに参加することで、語り手は自分とまちの関係について新たな気づきを得て、語りが進化していく、ということがあるかもしれない。また、他者の語りに触れることによって、牛窓の街の「こういうところが大事だよ」ということが見いだされて、もしかしたらそのような共通項の積み重ねがまちの将来ビジョンになっていく。そのようなことを期待しつつ、でも押し付けにはならないように、サイクルをまわす場を用意しているつもりです。

市の方でも、牛窓まちなか再生推進事業という国の補助金を使った事業が動いており、エリアプラットフォームを立ち上げようとしています。そのような行政の取り組みの中で私たちが提案した「読書会」も、組織・体制づくりやビジョン作成をより効果的に進めていくための場として位置付けられています。

私たちの興味・関心ではじめた活動が、計画づくりの実務に活用されるということは、活動が実践と深く連携しながら展開していく可能性があるということです。このような計画づくりと主体形成のプロセス自体も記録して、「計画を記述する」を現場で検証していきたいと思っています。

————— ありがとうございました。では、次の対話に進めてまいりましょう。

※同ワーキング（3rd フレーム_B）は、2023年2月20日（月）大阪ガス御堂筋東ビル会議室にて行い、川中大輔、前田昌弘、山口洋典（途中退出）、弘本由香里が参加した。